
DENGKI ~ 雷帝の軌跡 ~

髭伯爵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DENGEKI ～雷帝の軌跡～

【Nコード】

N0013K

【作者名】

髭伯爵

【あらすじ】

体から『電撃』を放つ能力を持つ不良高校生・弘崎雷道<ハライザキライドウ> 謎の男に強制的に異世界へと放り込まれた彼の伝説が始まる！！ 「不良が拳を握る理由はたった一つ。…気に入らねえ奴をぶちのめすためだ！」

プロローグ：ハジマリ ミチヒキ（前書き）

…こりずにまた新作作ってしまいました。 笑えよ…。

今回の作品は私としては珍しく完結までのストーリーが大方できて
おりますので、最後まで書ききることが出来ると思います。

プロローグ：ハジマリ ミチビキ

「なーんでこんなことになっちまったかねえ…」

顔面目掛けて殴りかかってきた不良の拳を避け、通り際そいつの腹へと膝を叩き込みながら、俺はため息をついていた。

只今放課後。俺は現在通学している高校の旧校舎の教室にいる。周囲には、ガラの悪い不良が10数人ほど集まっていて、リーダーらしき金髪で鼻にピアスを付けたチンピラっぽい以外全員が、俺へと向かってきていた。

…ハイ、どうみても喧嘩の真っ最中です。しかも一対多数。まさに外道。

「つと！」

左にいた不良の顔面に拳を叩きこんでいると、後ろから別の奴が教室内の椅子を俺へと叩きつけようとしてきていた。俺はちよつと慌てながら横にずれて避け、そいつの鼻っ柱に肘をぶち込む。

「危ねえだろが！」

「ぶごっ！？」

慌ててたんで手加減が利かなかつたらしい。妙に湿り気のある音と共に、俺の肘を食らった不良は盛大に鼻血を噴出しながら後ろに倒れこんだ。鼻骨が折れたらしい。すまん。

とはいえ、そんなことを気にしてられるのも一瞬だけ。俺は四方八方からバカみたいに突っ込んでくる不良どもの相手に忙しいのだ。

「(そもそも何だっつて俺はコイツらに絡まれてんだっけ? イマイチ覚えがないんだよな)」

右側にいた不良のパンチを片手で受け止め、そのまま腕を掴んで引つ張り俺の正面にいた別の不良へとぶつけながら、俺は心の中で首を傾げていた。実際の俺の首は周囲の状況を常に把握してようと目まぐるしく動かしてるんだけどな。

「テメエらそれだけの人数で何やってやがる!? とつとつぶち殺せ!」

離れて見ているだけだったリーダー格の金髪ピアスが業を煮やして怒鳴る。あー可哀想に、不良どもめっちゃビクついてるよ。

待遇の悪そうな不良どもにも同情しながら、俺は動きの鈍くなった不良ども数名に次々と容赦なく拳をぶち込んで床に沈めていく。残念だけど、これって喧嘩なのよね(意味不明)。

「おーい笹山あ。そんなとこで高みの見物決め込んでないでテメエも来たらどうだーっつと」

メリケンサックを付けて殴りかかってきた奴の腕を避けると同時にしっかり掴み、そのまま空いた手を肘へと当てて思い切り押す。

ゴキイツ! と鈍い音を立てて逆方向へと曲がった肘を押さえながら床に崩れる不良の顎へ、駄目押しの手を叩き込んで昏倒させる。

「うるせえ! 黙れ!」

「却下」

笹山の申し入れを一蹴しながら、箒を持っていた不良の手元に蹴りを入れて箒を落とさせる。埃舞うからんなもの振り回すな。

殴りかかるな。

蹴られた不良が手を押さえている間にそいつの顎を殴り飛ばすと、他の仲間がやられまくってオタオタしていた最後の1人に駆け寄り、飛び膝蹴りをプレゼント。

「オラよ！」

「べはあー！」

最後の1人ということもあり、特別ボーナスとして威力を強めてみました。超迷惑だけど気にしない。とつとと殴られなかったのが悪いんだ。

「ハイこれで終わりっと。後はお前だけだぞ笹山ー」

「うっぐ…！」

床で呻いてる不良どもを踏みつけないよう注意しながら着地して、笹山を挑発する。何せ、他の不良どもは全員床に転がり、呻いているところなのだ。

中には骨折者なんかも含まれている以上、しばらくは笹山の手助けはできないだろう。ていうかそれぐらい痛めつけたつもりだから、起きてこられると自信なくすね。

「畜生…！ 相変わらずデタラメみてーな強さしやがって……！」

“雷帝”のあだ名は伊達じゃねえってのか！？ アア！？

「勝手にキレんな。後そのあだ名止める。恥ずいんだよソレ」

逆切れした拳句将来黒歴史認定を確実に受けるであろう恥ずかしいあだ名を言われ、俺は呆れ顔で答えた。

“雷帝”、というのはこの辺りの不良やチンピラなんかの間で出回っている俺の異名だ。なんでも喧嘩の際【尋常じゃない素早さ

で攻撃を避ける】のと【攻撃を食らったときに電撃みたいなモノが流れてくる】とかいう噂の所為でできたらしい。

…まあ、両方とも『事実』なんですけどね！。

「で？　なんで人を手下使って呼び出した拳句、こんな舐めた真似してくれたの？」

笹山へと歩きながら、俺は後ろで呻いている不良どもを親指で指す。少なくとも最近は大入しくしていたし、笹山達に恨まれるようなこともしてない。

前は気に食わない連中に喧嘩を売っては全員ぶちのめしていたので色々と恨まれていたが、ここ最近では家族や友人たちの迷惑にならないよう自制しているのだ。

「そ、それは…！」

笹山は何故だかはっきりと理由を言わず、口をつぐんでいた。

おかしいな。　てっきり『てめえが気に食わねえんだよお！』とか言つて隠し持つてる警棒かナイフで襲い掛かってくるかと思っただんだが。　実際何回があったし。

「一体どうしたってん…！」

俺が疑問をそのまま口にしようとした、そのときだった。

ゾク……。

「!？」

突然だった。　今まで17年間、チンピラや不良、時にはヤクザや悪徳警官と戦りあったことのある俺でさえ体験したことのない、

凍りつくような悪寒が背筋を走った。

気がつくとも俺は咄嗟に横に飛び退り、体を反転させて背後を睨みつけていた。

「おやおや、まさか気づかれますとは…。予想以上に素質をお持ちのようですね、はらこぞうらいとつ 弘崎雷道様」

教室の入り口に、眼鏡をかけた優男が柔和な笑みを浮かべて立っていた。優男は笑みを崩さぬまま慇懃無礼な話し方で俺の名を呼びながら、俺の方へと歩み寄ってくる。

間違いない。こいつが悪寒の正体だ。

「…どちらさんで？ 生憎おたくみたいないけ好かないイケメン野郎には知り合いななんていないんだけど？」

「これは手厳しい。まあ無理もないですがね」

優男は数歩歩くとすぐに立ち止まった。体の向きは俺に向けたまま、目だけをついと動かして笹山へと向ける。

「ご苦労さまでした笹山様。これで貴方様の役目は終わりです」
「…」

そう言っって綺麗なお辞儀を見せた優男に対し、笹山は無言のままだった。握りこまれた拳と、殺気がふんだんに盛り込まれた視線だけが、アイツの心境を物語っている。

「…どういうことだ？」

「実は今日笹山様が弘崎様に襲撃を仕掛けたのは、私が頼んだからなのです」

「ぐ…！」

優男の言葉に苦虫を潰したような表情で唸る笹山。なるほど、道理で今日はアイツらしくない闘い方で来たと思っただぜ。

本来、笹山は部下と一斉に襲ってくる戦法を得意としているのだ。時に部下の中に紛れて奇襲し、時に物量と勢いで押し切る。そして、絶対に部下だけに任せたりはしない。

なのに今日は怒鳴りつけたりもしたのだ。最初から違和感を感じていたのだ。

「この地域に存在する不良集団を調べた結果、笹山様の勢力が弘崎様の力量を試すのに最適だったのですよ。ですから、お力をお借りさせてもらったのです」

「何だと!？」

「落ち着け」

どうやら理由までは聞かされていなかったらしい。激昂した笹山が優男に掴み掛かろうとするのを片手で押さえながら、俺は優男を睨む。

「…報酬は『笹山の妹の病気を回復させる』ってどこか？」

「!？」

「おや、知っておられましたか」

俺の一言に、笹山と優男が驚きの表情を見せる。もっとも、優男の方は妙に芝居がかった様子で驚いているので、多分大して驚いてはいないのだろう。

「俺の従姉弟がコイツの妹と友達なんでな。それよりも、中々クサれたことをしてくれるじゃねえか…!」

俺は自分のことを『不良』だと自認している。色んな人に迷惑を掛けながら、それでも我を通そうとしてまた他人に迷惑を掛ける大馬鹿野郎だ。

だからこそ。こんな俺だからこそ。守るべきこととは何か、大切にすべきこととはなにか分かっていているつもりだ。

この優男は、それを踏みにじった。腹の立つ笑顔で、家族を想う笹山の気持ちを傷つけた。

こいつは実に 気に入らない！

「てめえが何者か、まずそいつを聞こうかと思ったが……止めだ」

笹山を押さえていた左腕を下ろすと、俺は右手を上げ、優男を真っ直ぐに指差す。

既に、俺のキレ具合はMAXを振り切っていた。

「そのスカした顔面を殴り潰してから、ゆっくりと聞いてやるよ」

口の端を限界まで吊り上げ、俺はありったけの殺気を込めた視線を優男へと叩き付けた。

「ほづ……」

「……」

優男の感心した様子の声と、すぐ後ろの笹山が息を呑むのは同時だった。笹山は俺がマジ切れしたときに遭遇したことがないはずだから、俺が出す殺気と威圧感に呑まれたんだろう。

だが、あの優男にはそんな様子は微塵も感じられない。どうやら、考えていたよりもあの野郎は厄介っばい。

「ここまでの迫力とは……。いやはや、弘崎様は本当に素晴らしい

素質をお持ちのようだ」

「…まさか平然としてるなんてな。そこら辺の雑魚じゃビビって座り込んでしまっぐらいなんだが」

「私も少々荒事を経験していますからね。そのような無様な姿は見せずに済んでいます」

あくまで笑みを崩さず、にこやかに話しかけてくる優男。少々？ 現役のヤクザが怯むぐらいの威圧感を食らってるくせに何を言ってるのだろうか、この野郎は。

突然、優男が両手を左右へ大きく広げ出した。咄嗟にいつでも飛びかかれるよう足に力を込めた俺に、優男は笑みを深くする。

「合格”です弘崎様。あなたこそ、私が長年捜し求めていた逸材だ」

優男がそう呟いた瞬間、俺の目に映る世界が『ぐにやり』と歪んだ。

「なっ!?!」

視界に入った世界全てが歪に捻じ曲がり、解け合わさっていくという異常すぎる光景に、流石の俺も驚きを隠せず動揺する。

ただ、変わらないものもあつた。背後にいた笹山ですら歪んでいくの確認できたのに、俺と優男だけは全く変化がないのだ。

俺は慌てふためきながら、優男は両手を広げたまま、同じ場所に立ち続けている。

「てめえ…! 一体何をしゃがった!?!」

「私はずっと探していたのですよ! あなたのような存在を!」

「人の話を聞きやがれ!」

俺の怒鳴り声に全く取り合わず、優男は興奮した様子で捲くし立ててくる。まるで、待ちわびた最愛の恋人に巡り会えたかのように。

「何人にも媚びず！ 何事にも引かず！ 鋼の如き意思と異能の力を持った少年を！！」

「!?!」

優男の最後の一言に、俺は一瞬呆然となった。

こいつ、なんで知ってやがる!?

「て、てめえ!?!」

「ハハハハハ！ 私は知っていますよ？ 君が隠し続けている“力”についても！ 君自身の出生の秘密についても!?!」

優男の言葉一つが、俺の冷静さを奪っていく。何故、こいつは親友にも家族にも隠し続けている俺の“力”を知っている?!

ガキの頃から、俺にはとある力が宿っていた。体から『電撃』を放出できる、という力だ。

始めは軽く痺れさせることぐらいしかできなかったこの力は、17年の年月と様々な喧嘩の中で徐々に成長していった。体内の神経伝達に使われる電気信号を操作して、身体能力を底上げしたり痛みを和らげたり等。喧嘩の際には攻撃を当てたときに相手へ電撃を食らわせて気絶させたりなど。

ただ、この力のことを他人に告げたことは一度もない。幾ら俺でも、化け物扱いされるかもしれないと思ってしまっただけに誰にも言い出せないのだ。

全身に纏っていた雷光を周囲に放つてみても手応えは全くない。
あの野郎は一体どこに隠れていやがるのか。

「出て来いクソツタレがあああ！！！」

（申し訳ありません。非常に心苦しいのですが、そろそろ時間なので）

「何の話だ…がっ!？」

突然、俺の体に異変が起きた。頭が割れるのかと錯覚するほどの強烈な頭痛が襲ってきたのだ。

（大丈夫ですよ。痛いのは最初だけですから）

「てめえ…！絶対嘘だろ…！！！」

『痛いのは最初だけ』とかは信用しないことにしている。最初以外でも猛烈に痛い目に遭うし。特に歯医者とか。

だが、文句を言うことはできても、俺の体はそれ以上ついてきてはくれない。強烈な頭痛が体の自由を奪っているのだ。恐らくこのまま痛みが続けば意識も途切れるだろう。優男はそれを待っているのだ。

「俺を…どうするつもりだ…！！！」

（弘崎にはとある所で旅をしてもらいたいですよ）

「…旅？」

そろそろ意識がヤバイが、何とか根性で繋ぎとめながら聞き返す。せめてほんの少しでも情報を得ること、それが今の俺にできる精一杯のことだった。

だが、優男の次の一言を聞いて、俺はさっさと気絶しておくべき

だったかと後悔することとなった。

(ええ。“異世界”を旅して来て下さい)
「…は？」

予想だにしなかった単語に、俺は痛みも忘れて一瞬呆然となる。
その所為で限界だった意志力が完全に切れてしまい、俺の意識は
一気に急降下していく。

(それでは良き旅を…。 “雷帝”様)

意識が途切れる直前に見えた優男の笑みに対して、俺は…。

「…」

中指をおっ立ててやることしか、できなかった。

プロローグ：ハジマリ ミチビキ（後書き）

人物設定【現時点でのもの】

一 弘崎雷道<ハライザキライドウ>

本作の主人公。 高校2年生。

- ・ 自他共に認める『不良』。 教師やクラスメイトはおろか、家族や友人、果ては自分自身で自らが不良だと認めている。
- ・ 己の決めたルールにのみ従い、他者にいいように扱われるのを極度に嫌う。 ただし忠告や助言などは大人しく聞き入れる。
- ・ 意外に面倒見は悪くなく、困った人を見るとなんだかんだ言いながらも助けようとするお人好し。 だが、気に入らないことにはとことん抵抗し、場合によっては交戦も辞さない。
- ・ 特に弱者を痛めつける者に対しては全く手加減をせず、完膚なきまでに叩き潰してしまう。 そのためか、非常に人望が高い。
- ・ 通学している高校や周辺地域では、“雷帝”の異名で恐れられている。 原因は、雷道が『気に入らない』という理由で名づての不良集団や暴力団を潰してきたため。 本人は厨二病っぽいあだ名のため呼んで欲しくないとか。
- ・ 幼少時より電撃を放出し、自在に操る能力を所持している。 年月と経験により能力も鍛錬され、今では喧嘩の際に使用されるほどの力となった。
- ・ 主な用途は神経組織の電気信号の伝達速度を上げて反応速度や身体能力の底上げ。 また攻撃の際に微量の電撃を相手に流して動けなくする等。
- ・ 周囲から孤立するのを恐れて、能力のことは自分以外には全く教えようとはしない。 だが、その所為で寧ろ周囲との明確な違いを

感じてしまい、1人悩み続けている。

・今回、謎の男によって異世界へと飛ばされることとなった。

笹山<ササヤマ>

・雷道と同じ高校に通う高校生。 雷道と同じく不良で、雷道とは敵でもあるが味方でもあるという不思議な関係を持つ。

・病気で入院し続けている妹を持つ。 彼の妹と雷道の従姉弟が友人であるため、笹山もあまり雷道とは敵対したがない。

・あまり友好的な性格ではないが、身内には甘いらしく舎弟からの人望は厚い。 また、妹には逆らえないとか。

・今回は病床に伏す妹を謎の男に治療してもらうことを条件に、雷道を襲撃した。

謎の男

・今回の事件の鍵を握る人物。 素性・目的一切が謎に包まれている。 分かっているのは性別程度。

・笹山を使って雷道の力量を試した後、彼を異世界へと送る。 なにやら雷道本人すら知らない彼の秘密を知っているようだ…？

1話・ミチビキ マヨイロ(前書き)

ちよつと話の筋道が分からなくなるかもしれませんが、ご了承ください。
さい。

1話・ミチビキ マヨイゴ

何故かは分からないが、俺には昔から雷の音を聞くと落ち着くという妙な癖があった。それはきっと、俺の持つ異能の力が関係してるんだらうとガキの頃は思っていた。

だが、あるとき親父にその話をする、何故か嬉しそうに笑いながら、こんな話をしてくれた。

『そりや多分あれだ。お前には雷の音がホントは何なのか理解できてるからだよ』

『何だそりや？ 雷は雷だろ』

『違う違う。雷ってのはな、神様が悪党どもに対して一喝する声なんだよ』

『…』

『そんな残念な人を見る目で父親を見るんじゃない』

『いや無理もないと思うんだけど…』

『だがそう考えたら、あんなにデカイ音と光を立てるのにも納得できると思わないか？』

『えー』

『それに、お前だってあの音を聞くと安心するんだらう？ そりやつまりお前には神様の声が聞こえてて、悪党どもをビビらせてくれるんだって何となく理解できてるからなんだらう？』

『そうかなあ…』

あの時は全く信じていなかったが、今なら少しだけ信じられるかも知れない。根拠なんて、全く無いのだが。

「う…く…」

耳に飛び込んでくるのは、空から鳴り轟く雷鳴。意識がはつきりしていなくても分かった。なにせ携帯の着メロにしているのだから。日頃からゴロゴロ鳴ってますともええ。

雷の音が頭に響き、頭痛を悪化させてくれる。もうちょい優し
い起こし方が良かったよ。

「ああくそ…頭痛え」

頭痛がまだ残っている頭を押さえながら、俺は体を起こしていく。つて、ちよつと待て。

「ここはどこだ!?!」

目の前には、鬱蒼と茂る森が広がっている。どうやら、ここは森の中らしい。さっきまで教室に居たにも関わらず、だ。

…どうやら、本当に異世界へと来てしまったらしい。こんなフアンタジーな体験など、全く興味なしだったというのに。

「クソツタレ、やってくれるぜホントに…」

体についていた土を払いながら、俺は立ち上がった。何よりもまず、行動を起こさなければならぬ。まだ半信半疑だが、もしここが本当に異世界だというのなら、どこから危険が迫ってくるか分からない。

対人戦なら『電撃』の力で何とかなるかもしれないが、常識外の生き物 【怪物】 が出てきた場合、対処できるか自信が無い。

なにより、こっちは1人なのだ。 10数程度ならともかく、馬鹿みたいな物量で攻めてこられたら勝ち目なんてねえ。 というわけで、とつとこの森の中から脱出したいんだが…。

「…どっちに行きゃいいんだよ」

見渡す限りどんよりとした雲と森の木々と雑草のみ。 森の終わりも雲の切れ間も見えないんだけど。 もうちよつと親切にしてくれたっていいと思うんだよ大自然。

とはいえ、じつとしているわけにも行かない。 ていうかじつとしてるのに耐え切れそうにない。

「ハア…。 しゃあない、行くか…」

アテは全くないが、ひとまず移動してみるしかない。 幸い俺は勘の鋭さに定評がある。 適当に進んでも何とかなるだろう。

俺は大きいため息を吐くと、森の中へと入っていった。

〈数十分後〉

「出られねえー！…！…！」

さつきから休まず森の中を歩き回っているが、全く出られる様子がない。 ていうかまっすぐ進んでいるかどうかも時々怪しくなる。 歩きながら、持っていた十徳ナイフで木に傷をつけて目印代わりをしていたが、何度か傷をつけた場所へと戻っていた。 おかしい、自分は方向音痴とかではなかった筈。

「まさか、この森の所為か？」

森全体に旅人を迷わせる力が働いているのかもしれない。 だとするととんでもなく面倒だ。 少なくともこのままでは遭難し続けた拳句餓死してしまう。 そんなのは全力でお断りだ。

「かと言ってもなあ…」

俺は頭を掻きながら、頭上高くまで伸びている木々を見つめる。 最初は木の上に登ってどこかに建物とかが見えないか探してみようかとも思ったが、木の枝が細すぎて無理だった。

『電撃』の力を使って浮遊してみようとも思ったが上手くいかない。 今まで身体能力強化とバレない程度の攻撃以外じゃ大して使用してなかったたので、やったこともない浮遊術なんかを使えるはずもなかった。

手持ちの道具を使って切り抜けられるか試そうとしてみても、持っているのは十徳ナイフと煙草とジッポライター。 後は携帯とハンカチーフ。

…どう足掻いても、絶望D.A。orz

「いやいや待って待て。 ライターで火付けて狼煙を上げるといって選択肢があるじゃないか」

大火事になるかもしれないリスクがあるが、知ったこっちゃあり

ません。俺は華麗に逃げるぜ。

「ファイヤというわけでFIREEEEEEEEEEE!!!」

俺は躊躇うことなくライターを取り出して着火。近くの木の枝へと近づけていく。自然破壊？ 異世界だから気にしません。

だが、そう簡単に物事が上手くいく筈もなかった。

「!? のわつと!!!」

視界の端に映ったモノが何なのか確認する余裕もなく、俺は後ろへと飛び退っていた。しっかりと持っていなかったライターが手から零れ落ち、遅れて飛来してきた何かに貫かれる。

俺のライターを貫いたもの。それは、俺が今火を点けようとしていた木から伸びた、鋭利に尖った根っこだった。

「な!?!」

木に襲われた!? いや確かに襲われるようなことしようとはしてたけどなー! けどこっちにも言い分つーもんが…。

「つておわああああ!?!」

心の中で言い訳をしてたら、周囲の木々からも同じように尖った根っこが繰り出されてくる。幸い速度は大したことはないので連続でバックステップを行って避けきつたが…。

ドスドスドスドス!!!!

…めっちゃ深く刺さってるじゃん…。どれだけのパワー込め

てやがるんだよ!? マジで刺さったら重傷確定じゃねーか!?

「クソ! 36計逃げるに如かず!」

踵を返しながら瞬時に『電撃』の力を発動。身体能力強化を行って、後ろを向いた瞬間に大地を思い切り蹴って疾走する。

『電撃』は使うと体力とか消耗するからできれば温存してきたかったが、もうそんな暇も無くなっちゃった。急いでこの森から出ねーと死ぬ! かなり無残に!!

「ぬおおお!!」

少しでも消耗を抑えるため思考と速度のみ強化・加速させ、後はただひたすらに走り続ける。後ろから聞こえてくる『ドスツ!』とか『ガサガサツ』とかいう音は全力で無視。振り返ろうモンならその隙に串刺しにされちまう!

「ゴメンナサーーイ!!! もう環境破壊なんてしないから許してーーーー!!!」

情けない叫び声を上げながら、必死こいて至る所から繰り出されてくる尖った根っこを避けて逃げ続ける。根っここの飛来するスピードが遅めなのでなんとか回避できてるが、なにせ周りは木ばっか。全方位から繰り出される攻撃を避けるのはかなり面倒なのだ。とかなんとか言ってる間に、いつの間にか前方に大量の根っこが現れてて…うおおこっち来たあー!

「のおああ!!!」

逃げる隙間のほとんどない広範囲攻撃を、俺は咄嗟に上へと思

切り跳躍することで回避。 ついでにとある目的のため、十徳ナイフをなるべく離れた場所へと投げしておく。

直後、俺の真下を大量の根っこが通過する。 普段よりも強化されている脚力のおかげで何とか回避できた。 だが、それこそが今の攻撃の狙いだらう。

空中では、重力に従って落下することしかできない。 つまり、向こうからの“攻撃を回避することができない”のだ。

案の定、地面から新しい根っこが顔を覗かせ始めている。 それも今の攻撃よりも格段に多い数だ。

…だが、生憎とこちらは大人しくやられてやるつもりなど、毛頭ない！

「<マグネティックフォース・IN>!!」

既に体は重力に従って落ち始めている。 だが、俺はそれに構うことなく、先ほど投げ飛ばして地面へと突き刺さっている十徳ナイフへと向けて、右手を伸ばす。

すると、投げる直前にナイフへと込めておいた『電撃』が強力な磁力を発動。 同時に俺の右手にはナイフとは反対の磁極を発動させる。

「ヒヤッホオオ!!」

すると、ナイフの強力な磁力によって俺の体ごと、右手がハイスピードで引っ張られていく。 一瞬前まで俺が居た空間を、根っこが虚しく空を切った。

<マグネティックフォース>は俺が作ったオリジナル技の一つ。

自身と対象物の磁力を操って物や俺を引き寄せたり離れさせたりする技だ。

近距離なら電撃を放って直接磁力を与えるのだが、電撃自体の射程距離はあまり無いので、遠距離だと今みたいに先に対象物へ『電撃』を込めておかないといけない。

開発理由はリモコンを取りに行くのが面倒で、その場から動かすに取れないかと思ったのがきっかけです。『電撃』の出力ミスしちゃって一台壊したけどね！

「いよつとー!!」

地面が近づいてきたところで右手の磁極をナイフと同じ極に変えて、反発させ合ってブレーキ代わりにし、俺は地面へと着地。多少よろけたが、<マグネティックフォース>による急加速のお陰でこの隙を突かれることはなかった。

「さて、とつとこの森から出るとしますか…」

磁力によって砂鉄なんかが付着しちまってるナイフを地面から引き抜きながら、一歩前へと踏み出す。

ズボッ！

「ね?」

アレ、なんか盛大に足を踏み外した感覚が…つーかなんか体が自由落下してくんですけどー!? まさかこんなとこに落とし穴かー!?

「そりゃねえだろオイイイイー!!!???? のあああああ
ああー!!!!!!!!!」

あまりにも突然過ぎて何の対処もできず。
げながら穴の中を落ちていった…。

俺は派手な悲鳴を上

1話・ミチビキ マヨイゴ（後書き）

技解説

『電撃』

- ・雷道が持つ異能の力。電撃を自在に操り、様々な事象を引き起こす。
- ・単に放電現象を起こすだけでなく、神経伝達に使われる電気信号に干渉して身体能力を強化したり、磁力を操作するなどかなりの多様性を持つ。また、一時的に触れたものに『電撃』を込めておくことも可能。ただし長時間留めておくことはできない。

以下、『電撃』を使用した技の一例

<身体能力強化>

- ・筋肉や神経を『電撃』によって活性化させ、一時的に身体能力を上げる。やりすぎると体に負担が掛かるので、上昇には限界あり。

<反応速度強化>

- ・体内の電気信号の伝達速度を上げて、咄嗟のときの反応を良くする。こちらも速度を上げすぎると神経組織に障害が残る可能性あり。

<マグネティックフォース>

- ・磁力を操作して対象物や自身を移動させる。 <IN>は引き寄せ、<OUT>は反発を行う。

- ・遠距離への移動の際は、先に『電撃』を固定された対象物に付与させ、その対象物へと自身を移動させる。ただし、元から強い磁

力を持っている物ならば付与の必要はない。

2話：マヨイゴ イセキ（前書き）

日曜日の方が執筆進まない！ 不思議！
…ぐーたらし過ぎてるだけでした

2話：マヨイゴ イセキ

「ノオオーーーーー!?!」

未だ盛大に落っこちてる最中の雷道です。すぐ出口に到着するかと思つたら意外と長いよこの穴!? 段々と斜めになってきてるし!

とはいえ、流石に無限の長さを持つていたわけではなかったようだ。遙か下の方に、僅かに光が見える。多分あそこが出口なんだろう。あービビツたー。

……ブレーキはどこ? 今結構スピード出てますよ?

「…またピンチかあー!?!」

このままでは大怪我は確実。俺は咄嗟に手に持ったままだった十徳ナイフを壁に突き立てる。

ガリガリガリガリ!?!?!

「ぐう!」

ナイフを持つ左手にかなりの衝撃が伝わってくる。片手で保持するのはキツイが、何とかスピードが落ちてきた。このまま行けば怪我だけは免れるかもしれない…。

「どはあ!?!」

とか考えてる間に出口へ到着してましたー。スピードを減速し

きれなかったので、地面へと派手に飛び出しながら。　めっちゃ痛え
！？

「け、ケツがあー！！　ぐおおおー！！」

仰向けだったのと足をちよつと浮かせていたため、思い切りケツ
を打つ羽目に。　裂けた！　これケツ裂けてるよ絶対！？

「いてて…　<電療>っつと」

痛むケツに手を当てて、自己治癒力強化と痛覚に軽度の麻痺を与
える微量の電撃を流し込む。　これで痛みはある程度引く。

と言っても、痛覚麻痺は軽い麻酔程度のもので、完全には消
えないが。

「やれやれ、さっきから酷い目にしか遭ってねえなあ…」

服に付いた土やら砂やらを払いながら、ケツをちよつと気遣いつ
つ立ち上がる。　ていつか数十分前にほとんど同じ動作してた俺
服洗いてー！。

「にしてもここは…」

立ち上がって改めて、周辺を見回してみる。　明らかに自然に出
来たものではない、幾重にも積まれたブロックで出来た通路。　そ
の壁には、全く消える様子のない蝋燭が通路に等間隔で並べられて
いる。

…ここは洞窟じゃなくて、ダンジョンなのか？

「参ったな　まさかこんなところに繋がってるとは」

頭を掻きながら途方に暮れる。　まず落とし穴から入ってきたので、全く出口が分からないし、今手元には水や食料はゼロ。

なによりの問題は、おそらく潜んでいるだろう【魔物】だ。ぶつちやけ侵入者を惑わせる森の地下深くに存在する遺跡に、モンスターがいけないというのはありえないだろう。

小型ならまだしも、人の身丈を超える大型の個体と遭遇した日には…ああ、なんか悲鳴上げて逃げる自分がありありと想像できるわい。

「どうすっかなあ…」

落ちてきた穴を戻るのは恐らく体力的に不可能。　途中で落っこちようもんなら体の前に心が折れるね。　間違いなく。　となると、やるべきことは一つしかない。

「出口を探しに行く、しかないかあ…」

さつきも移動してから酷い目に遭ったので、本音を言えば動きたくない。　だが、動かないことにはどうしようもないのだ。

「まったく、こつというのは気に入らないんだがな…」

まるで、誰かの手の平で踊らされているような気分だ。　しかも他の選択肢がないのでいい様に動かされるしかないのがさらに腹が立つ。

仕方ない、今は踊らされてやるよ。　ま、最後まで踊りきるつもりはゼロだけだな。

「さて、と。　とつとつこつから出て、黒幕探し出してボコらねー

とな」

気合は充分。コンディションは上々。状況は最悪。お先は真つ暗。考えうる限り最低で最悪で最高の状態。これくらいの方が、喧嘩するにゃ 丁度いい。

気付け代わりに右の拳を左手の手の平にぶつけると、俺は洞窟を抜け出すために歩き出した。

（10分後）

「いよつと」

『ギイイ!?!』

前方に飛び出してきたモノを踏み台にしてさらに上へと、前へと跳躍する。踏み台にしたのは、体長が1m程のデカイ蝙蝠の化物。しかも、ただデカイだけじゃない。

『ギヤア!?!』

「またかよ!」

踏み台にしたのとは別の蝙蝠が、奇怪な鳴き声とともに口から超

音波を吐き出す。空気を歪ませながら接近する音の波を手から放出した電撃で吹き飛ばすと同時に、蝙蝠へと電撃をくれてやる。

『グエエエ！?』

… ちょっと出力上げすぎたかもしれないが無視。悲鳴と黒煙を上げながら床へと落ちる蝙蝠には目もくれず、着地と同時に走り出す。

なにせ後ろにはまだまだ蝙蝠どもがいやがるからな。立ち止まったら一斉に飛び掛られて踊り食いされちまう。

『ギヤアアア！!!!』

「やかましいわ!!」

『ギヤボ!?!』

後ろから急接近してきた蝙蝠の顔面に肘を叩き込み、ついでに軽めの電撃も流して痺れさせる。これは喧嘩のときにいつも使う技で、たとえ一撃で沈められてなくても相手はしばらく動けなくなるので多用してる。あと電撃が流れているのがパツと見分からないのも強みだ。

『ギヤア!?!』

『ギギイ!!!!』

鼻血を噴出して後ろへと吹っ飛ぶ蝙蝠にぶつかった他の蝙蝠数匹が声を上げるが、後ろからはまだ羽音が聞こえてくる。ホント何匹いやがるんだ!?!

「あああド畜生があああ!!! ホンツツト厄日だクソツタレエ

エエエエエエ!!!!!!!!!!」

この蝙蝠どもと遭遇したのは偶然だった。 たまたま横切った通路が妙に薄暗くて目を凝らしてみたら、突然赤く光る点が無数に現れたのだ。

それでビビって声を出しちまったのがいけなかった。 どうやら休眠状態っぽい感じだった蝙蝠どもがそれで完全に起きてしまい、俺は連中の餌として追われているってわけだ。

…ええうっかりですよ油断してましたよ誰だ天然つつつた奴ぁー！？

『ギギヤア！』

「あらよつと！」

急加速して俺へと突っ込んできた蝙蝠を、壁を走って回避。足の裏に一瞬だけ『電撃』で磁力を発生させて壁に引っ付かせているので、壁走りなんて曲芸もできるのだ。

『ギシヤアア！…！』

「つとぉー！」

蝙蝠2匹が同時に吐き出してきた超音波を天井へと飛び上がった回避。 体勢を上下入れ替え、膝を思い切り曲げて天井に着地すると、両足のバネをフル活用して前方へと飛び出す。

『電撃』によって強化された脚力は俺の体を弾丸が如く加速させ、後ろの蝙蝠たちとの距離を大きく開かせる。

『ギヤアア！』

『ギギギイ!』

だが、待ち伏せでもしていたのか別の通路の陰から2匹飛び出してきて、俺の前へと立ち塞がってくる。俺はくるりと体を回転させて…

「オラア!」

『『ブギヤ!?!』』

2匹が重なり合うように並んでいたのを見て、思い切りドロップキックをぶち込みました。俺の勢いそのままに蹴りをぶち込んだので、そのまま2匹を巻き込みながら地面へと向かう羽目に。

「いよつとおおお!?!」

『『グギヤアアアア!?!?!』』

蝙蝠2匹をクッション代わりにして着地したら、予想以上に勢いが付いてた上にこいつ等滑りやすい肌をしてたらしい。スケボーよろしく俺は蝙蝠をボード代わりにして滑る羽目に。やだ意外と楽しー!

なんて調子こいてたら、いつの間にか曲がり角へと来ていた。やべ! ぶつかる!

「あらよつと!」

『『グベ!?!』』

とりあえずぶつかる直前に曲がり角の向こうへと飛び、ブレーキなんて素敵な物は装備されていないスケボー(蝙蝠2匹)は哀れ成す術もなく壁へと激突。なんかズドン!とか凄い音が聞こえただけと知りません。俺の邪魔をしたお前らが悪い。

「つと。 どうすつかなこれから…」

今度こそともに床に着地して、俺はまた走り出す。 結構な距離を稼いだので後ろから羽音は聞こえてこない。 だが、今みたいに物陰から飛び出してくる連中もいるので油断はできない。

というか、あのデカイ（多分）肉食蝙蝠どもは恐らくこの遺跡で一番数の多いモンスターで、ここに至る所に潜んでいるんじゃないか？ それなら大して知能が高いわけでもないのに待ち伏せを食らうことも頷ける。

となると、闇雲に逃げててもまた遭遇する羽目になるなあ…。

「面倒臭えなあ。 かといって一々闘ってたら体がもたんし」

しばらくは慎重に行動しなきゃならんな。 某蛇のコードネームを持つ伝説の作業員みたいにバレないように移動しなければ。 でも俺の『電撃』って勘のいい奴だとバレやすいからな。

（ ）
「ん？」

？ 今何か聞こえてきたような…？ いやでも、蝙蝠どもの羽音とかは聞こえないしな。 …まさかまた別のモンスターが現れて…

（ ）
「！ これは…」

聞こえた。 確かに聞こえた。 蝙蝠どもの羽音でもなければ、別の見知らぬモンスターの声でもない、何か異質な声が耳に届いていた。

いや、この声は耳に届いてるんじゃない。俺の『頭の中』に届いているのだ。その証拠に、この声は妙に頭に響く。

(コツチ)

微かに響いた声。それは、通路の奥から聞こえてきたように思えた。特に確証などはないが。

「…もう聞こえない、か」

いつの間にか、声は止んでいた。声の主は、この通路の奥にいるのだろうか…？

「…」

俺は奥へと歩き出した。畏かもしれないが、それならぶち破るまでだ。わざわざ向こうからご指名を受けたのだ。ご期待にはお応えしないとダメだろう？

やがて、特に妨害も受けなかった俺は奥へと到着した。

「こいつはまた…」

目の前には、巨大な門がドン！と建てられていて、俺を圧倒してくる。中央部に人の顔を模した彫刻が刻まれているのもまた、存在感を増すのに一役買っている。突然喋り出しても違和感ないぜ。

「声の主は…こん中か？」

こんな馬鹿でかい扉、どうやって開けたらいいんだ？ そもそもどうやって作り出したのやら…。やっぱ魔法で作ったんかな？

そんなことを考えながら、俺はつい好奇心で扉に近づき扉へと手を伸ばしていた。このとき、俺はもう少し警戒するべきだった。

ずりゆ。

「のあつ!?!」

扉に触れた瞬間、扉が歪み、右手の手首から先が飲み込まれていったのだ。そのあり得ない光景に、俺の思考が一瞬で凍りつく。

「ど、どうなって……くそ、抜けねえ!!」

飲み込まれた右手を引つ張ってみても全く動かない。何か固い物に挟まれているような感触が飲み込まれた右手から伝わってくる。ていうか、どうみてもおかしいよねコレ!? 石造りっぽい門に片手引きずり込まれるとかどんなんだよ!? ずりゆとかすっごい湿り気のある音がしたし!

「こなくそ! 放せオラア!!」

1mmたりとも動かない右手をなんとか引つ張り出そうと、俺は左足を扉に当てて引つ張る力を強めようとした。

…このときは、さっき『扉に触れた右手が飲み込まれた』ことを完全にド忘れていたのだ。

ずりゆりゆ。

「ギヤアア墓穴掘っちゃったー!?!」

見事に左足も飲み込まれました。うわーいなんか生々しい感触がするよー! ていうか膝まで一気に入っちゃったよオイイイイ!? 足まで入ってきたので本気出してきたのか、ゆっくりとだが体が

扉に飲み込まれていく。

「うおおマジやべええー！？」

腰から下が飲み込まれて流石に焦り出した俺は、咄嗟に残った左手を伸ばし、＜マグネティックフォース＞を発動させようとする。磁力で無理やり出ようとしたのだ。

「＜マグネティックフォース＞！」

だが、それは叶わなかった。何故ならそのとき、扉の一部がせり上がって来て、俺の口と左手に触手の如く巻き込んだのだ。

これでまさしく、手も足もでなくなった。俺オワタ～（＾o＾）！。

「ムガアアーーーー！！？？」

こうして俺は、扉の中へと飲み込まれていった…。

「 きろ」

「…ん」

誰だ人が気持ちよく寝てたのに起こそうとしてるのは。人様の安眠を妨害する奴は死んでしまえ。もしくはお前も寝てしまえ。ぐっすりと。

「起きろ」

「ぐぼお!?!」

どてっばらになんか凄い衝撃が来たよ。中身出るかと思った。わりかし本気で。

「ぐぼお…! 内臓があ…!?!」

「さっさと起きぬからじゃ」

痛みで床を転がる俺の耳に、誰かの不機嫌そうな声が届く。ち、畜生…! 人を睡眠という名の幸福から引きずり出した上にこんなドギツイ目に遭わせてくれやがって…! 貴様にも同じ苦しみを味合わせてやるうか!?

「酷えことしてくれやがって…! 覚悟はできてんのかコラ!?!」

「ほほう? 随分と威勢が良いな小僧。そんなに死に急ぎたいか?」

激昂しながらヨロヨロと立ち上がった俺に浴びせられたのは、傲岸不遜な言葉ともう一つ。

氷のような冷たさと感じさせる、薄ら寒い殺気だった。

「!?!」

すぐさま俺はいつでも飛びかかれるよう体勢を整えると、殺気を浴びせてきた奴を見る。

「レディに対する態度がなっておらん小僧？」

そこにいたのは、1人の女。

全身を鎖で縛られた、絶世の美女。

2話・マヨイゴ イセキ（後書き）

話の進行上どうしても人を上手く出せないなあ…

かといってこの辺りで下手に登場させると大変なので躊躇ってます。

つーむ…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0013k/>

D E N G E K I ~ 雷帝の軌跡 ~

2010年10月9日17時17分発行